

〔特集〕「比較思想は現代に何を貢献しうるか」3

比較思想の未来

*桑木務氏が急病になられたため、あらかじめ提出されていたレジュメを掲載致します。

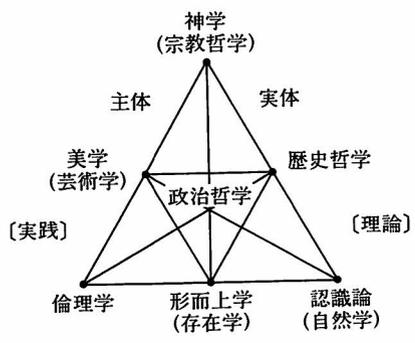
1. 私の哲学の立場

これにはまず以下の図表―1の田辺元博士(一八八五―一九六二)による「哲学の区分表」を手がかりにして、次に図表―2が示す私の「哲学の家」の構想を御紹介して、大方の御批判を仰ぎたい。

2. ささやかな比較思想の例

私は孔子(五五二―四七九 B.C.)のあの有名な「学而不思則罔思而不学則殆」と Francis Bacon が提示した「アリ (formica) とクモ (aranea) とミツバチ (apis)」の例とを比較して、たとえ東西二二〇〇年の時空を隔てたとはいえ、両者の学問精神

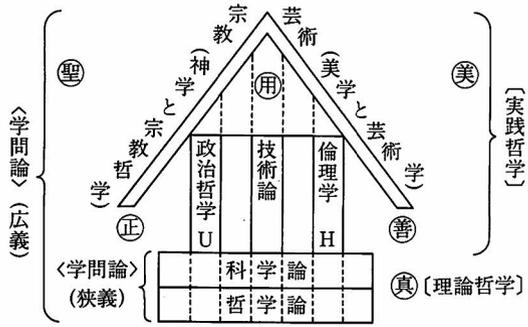
図表―1 田辺元博士による「哲学の区分表」



(「一哲学の根本問題」
『哲学入門』筑摩書房、1949年)

桑
木
務

図表-2 <哲学の家>見取図(桑木務)



(『哲学するころみ』北樹出版, 1993年)

ないし学問方法論を検討してみたい。

3. 比較思想の未来

以上によって私は、日本における〈比較思想(学)〉の洋々たる未来を祝福したい。

なお時間が許せば私は去る七月八・九日、日本未来学会の主催によるシンポジウム(宗教の未来)について、併せて御報告した

いと思う。

(くわき・つとむ、哲学、中央大学名誉教授)